

そうだったのか、グリーンランド

(前ページより続き)

ここで登場していただくのが、オルボー大学でもグリーンランドを含む北極プロジェクト研究でご活躍されていた高橋美野梨准教授(現在は北海学園大学)。

神谷さん、ありがとうございます。皆さま、初めまして。北海学園大学法学部でグリーンランド・北極の現代政治を研究しております高橋と申します。今回はこれまでに示された、それぞれに魅力的で核心的な事柄の基底をなす、デンマークにおけるグリーンランドの「位置」について考えてみたいと思います。やや遠回りになりますが、そうした両者の関係の基層のようなところに目を向けてみた上で、最後に、時事的な問題に話題を移していきたいと思います。

その前に、少しだけ日本におけるグリーンランドの「位置」について確認しておこうと思います。皆さんは、この冊子をご存知でしょうか(図1)。これは、1978年に創設され、日本で最も歴史ある北欧研究の学術団体、バルト＝スカンディナヴィア研究会(以下、バルト研)が発行する学術誌『北欧史研究』の表紙です。この表紙には、「バルト＝スカンディナヴィアという枠組の地域」(第8号「はじめに」1990年)を表す挿絵が添えられています。よく見ると、グリーンランドは描かれていません。「バルト＝スカンディナヴィア」の西側の輪郭は、アイスランドを包摂することによって同定されているようです。図法や縮尺の都合でグリーンランドを組み込めなかったという事情は推測されます。あるいは、バルト研の起点は、「バルト海周辺の北欧地域」(第1号「はじめに」1982年)を研究すること、そして結成当時の名称は「バルト海周辺地域研究会」



(図1)

(第6号「はじめに」1988年)であったということですから、地理的な境界を理由として、グリーンランドは意図的に外側に置かれた可能性もあります。しかし、グリーンランドが長きに渡りデンマーク(19世紀初頭まではデンマーク＝ノルウェー同君連合)の植民地であり、時間と空間の両面でデンマーク史を形作ってきたことをふまえれば、なぜグリーンランドが省かれたのか、やや不思議な気もしています。40年を超えて、バルト＝スカンディナヴィア研究をけん引してきたアカデミーの「顔」、その名も『北欧史研究』に、グリーンランドが不在であり続けてきたことを、私たちはまず確かめておきたいと思

それでは、デンマークの事情はどうでしょうか。デンマークでは

グリーンランドをどう位置付けてきたか、ということですね。この会報は、実際にデンマークに住んでおられる方々を対象に編まれています。デンマークを知る皆さんの中には、日々の生活の中で、自治領であるグリーンランドを身近に感じているという方も少なからずいると思います。他方で、デンマークに住んでいても、グリーンランドは遠い存在だと感じている方もきっといますよね。むしろこちらの方がマジョリティかもしれません。近いのか、遠いのかというのは主観の問題にすぎないので、深入りしても仕方ありませんが、この「距離」について、色々と考えさせてくれる文章があります。下に引用するのは、今年、創刊94年を迎えたデンマーク語のジャーナル「Økonomi & Politik」において、北極特集号(2021年第2号)が組まれた際に、コペンハーゲン大学政治学科教授のMartin Marcussenによって準備された「序文」の一部です。なお、この特集号には私の論文も掲載されています(…宣伝)。

多くのデンマーク人にとって、グリーンランドへの関心や知識は非常に限られたものだった。デンマークのいくつかの町では、伝統的にグリーンランドの町と姉妹都市提携を結んでおり、夏にはグリーンランドの小学生を受け入れてきた。これにより、デンマークの小学生は、王国が北極にまで続いていることを初めてかすかに実感することになった。しかし、そうした実感は、おそらくほとんどの場合、グリーンランドの子どもたちを何らかの形で手を差し伸べるべき存在、あるいは援助の対象という印象とセットになっていた。(中略)。氷山のスライドや伝統的な太鼓踊り(ドラムダンス)が映し出される。グリーンランドは、明らかにデンマークの現実とかけ離れていた。グリーンランドは、デンマークの自己認識とは完全に関係付けられない場所として認識されてきたかもしれない。デンマークの政治家がグリーンランドについて語ることはほとんどなかった。「グリーンランド語のニュース」は嘲笑の対象ですらあった。グリーンランド語はふざけた響きで、



ナショナルデーを祝うグリーンランドの人たち

風刺番組ではグリーンランド語やグリーンランド人を揶揄してきた。デンマークの社会学者が、北極の研究に専念したことはほとんどなかった。グリーンランド研究は、アザラシ皮のコートを着た少数の熱心なグループによってなされてきた。

表現や、Marcussenの見立ての是非はさておき、私たちがまず注意を払いたいのは、この文章が、デンマーク語で書かれ、デンマーク人に対して発出されたということです。デンマーク人は、この文章をどのような気持ちで読むのでしょうか。実は、私は小学校・中学校の大半をデンマークの現地校で過ごしました。上の文章を読んで、まず私が想起したのは、私自身の経験、つまり当時私が通っていた学校(小学校は公立、中学校は私立でした)でグリーンラ

ンドのことを学んだり触れたりする機会があったかどうか、ということでした。私が全く勉強しなかった…、否、当時私が通っていた学校では、毎日森に出かけたり、海に行ったりしていて、座学での勉強をほとんどしなかったからかもしれませんが、当時グリーンランドのことを学んだ、あるいは同級生と話をしたなどという記憶はほとんどありませんでした。「ほとんど」というのは、先に神谷さんもお指摘されたように、駅や街で泥酔しているグリーンランド人のことがたまに話題にのぼったからです。その際に、少なからぬ同級生たちは、グリーンランドやグリーンランド人を自然化するような物言い、つまり、本来であれば固定的な「グリーンランド(人)」などというのではないはずなのに、十把一絡げに、当然「そこ」にいて、例外なく「そう振る舞う」存在として、半ば諦めにも似たニュアンスを伴わせつつ、彼・彼女らのことを話していたような気がします。少なからぬ同級生たちは、などと書くと、「じゃあお前はどうかんだ」となりそうですが、恥ずかしいことに、その当時の私はグリーンランド(人)に対する情報や知識が著しく欠けていて、そうであるがゆえに、その場の雰囲気と同調しているところもあったように記憶しています。

いま、こうして、当時のことを思い出しながら、Marcussenの序文を読み直してみると、何かをまなざすとはどういうことなのかについて、あれこれ考えてしまいます。このとき、ジョン・アーリとヨーナス・ラーソンが共著で出版した『観光のまなざし 増補改訂版』(法政大学出版局、2014年)は極めて示唆的です。彼らは、この本の中で、見える=まなざすということは人が学び取った、あるいは権力関係の馴化などによって構築された文化的慣習でしかない、と言っています。つまり、純粹で無垢な目なんてないんだということを彼らは言いたいわけですが、ここで重要なことは、アーリとラーソンがいうまなざしなるものが、「わたし」の目に世界がどう映っているのかを表すだけでなく、「世界を整序し、形づくり、分類する行為」(p.3)という、より能動的なニュアンスを伴うものであるということです。「わたし」は、何かをまなざすことで、「わたし」の基準に沿う形で世界を整理整頓しているということのようです。そんなこと分かっているという方もおられると思いますが、Marcussenの序文に引き付けてみたとき、たとえばあのデンマークの小学生たちのグリーンランド(人)に対するまなざし、そしてそれは、今は大人になった「あなた」のグリーンランドに対する世界観が、誰によって形作られ、何によって権威づけられていた(いく)のか、そうした多様なまなざしが、グリーンランドとの関係の中で離合集散を繰り返しながら、ど

のようにして「デンマークの自己認識」(Marcussenの序文)の外側に配置されていくのかなどについて考える機会を与えてくれているように思います。

もっとも、既に神谷さんが適切に説明されたように、両者の関係を過分に二項対立的に捉えてしまうことも問題でしょう。実は、上で抜粋したMarcussenの序文は、「こうした認識は過去のものになった」と続きます。過去のものにするということは、ある種固定化された関係をリセットし、新しい文脈に接続させていくことに成功しなければなりません。そう簡単なことではありませんが、Marcussenは、その契機として、全地球的な環境問題の顕在化を挙げます。重要なことは、問題の顕在化が単に「環境」にかかるだけでなく、それを起点に、他の領域に波及していることです。その代表格には、グリーンランドにおけるウラニウムな



写真 上下とも ヌークの街並み

どの鉱物資源開発や、グリーンランドの西側を通行する航路=北西航路の商業的利用可能性、あるいは北極の戦略的重要性に注目が集まることでグリーンランドに設置されてきた米国の軍事基地(在グリーンランド・チューレ空軍基地)の価値がより一層高められる、などが挙げられます。

鉱物資源開発について少しだけ。議論は多岐にわたりますが、たとえばレアアース。現時点では、グローバルなレアアースの資源量に占めるグリーンランドの割合は3.44%(約489万トン)だと言われていますが、展開中の5つのプロジェクトの数値を含めれば今後数年のうちに、この数値は約3倍の9.16%になると言われています。あるいは、ウラニウムの事例では、その回収可能量の数値が明らかになっています。それによれば、現時点では102,800 kgU(金属重量)が回収可能と言われていますが、推定資源量125,100 kgUと合わせると、228,000 kgUになり、これは世界トップ10に入ることです。こうしたことを背景に、2000年代半ば頃からは、中国やロシアといった地域大国から直接投資の対象として熱い視線を注がれる対象になると同時に、数多の外国企業がグリーンランドに進出しました。莫大な利益を生み出す可能性を秘めていることから、今年4月に行われたグリーンランド議会選挙でも大きく争点化され、国論を二分し、政権交代をもたらすにいたりました。

このように、機会の窓が開かれつつある中で、グリーンランドとデンマークの関係は、かつてないほどに流動化の様相を呈しています。私の専門が政治なので、とりあえず政治の動きにのみ着目すれば、要点は大きく2つあります。①グリーンランドは



資源開発で注目を集める町ナーサーク

デンマークからの独立を、②デンマークは国家としての利益や価値を共構築していこうとする動きを見せている、ということです。①と②が協調的か、相反的かについて解を出すのは容易ではありませんが、大事なことは、(デンマークへの)統合か、(デンマークからの)分離かといった二項対立的な見方は異なるところで、両者の利害が議論されているという点です。①は、いわゆる分離独立だけが争点に上っているわけではなく、たとえばフリーアソシエーションのような国家として独立しつつも、部分的にデンマークが管轄権を保持するような緩やかな連合関係の在り方も議論されています。この議論は、グリーンランドの経済的脆弱性を引き合いに出すことで、独立は困難だとする見方へのアンチテーゼとしても機能しています。グリーンランドは、2017年時点で、自身のGDP比25%、予算比59%を、デンマークからの経済支援(政府一括補助金)に頼っています。このことをもって、独立が困難だろうという見方がありますが、独立なるものが経済的な観点のみで判断されることに、少なからぬグリーンランド人は違和感を持って見ているようです。フリーアソシエーションなど、多様なオルタナティブの模索は、こうした独立に対する固定化されたイメージの払しょくと、現実路線から、将来選択の多様化を図ろうとするグリーンランドの意思が垣間見えるような気がしています。

②は、グリーンランドおよび北極全体の政治的・経済的ポテンシャルに対して、デンマークが国家としてどのような対応を採っているか、ということを示しています。端的にいえば、近年のデンマークは、北極国(Arctic nation)としての法的な立場を安定的且つ継続的に確保するため、グリーンランドとの協調関係をいかに構築していけるか、ということを考えているようです。2008年にグリーンランドとともに共同開催した北極海会議(Arctic ocean Conference)は、その所信表明的なイベントとして位置付けられます。確認しておきたいのは、近年のデンマークが、グリー

ンランドとの間で、単方向的なニュアンスを伴う責任(ansvar)、決定(bestemmelse)、参加(inddragelse)、影響(indflydelse)ではなく、双方向性を印象付ける共同責任(medansvar)、共同決定(medbestemmelse)、協働(medinddragelse)、双方向的な影響(medindflydelse)に比重をおきながら、デンマーク国家としての権益確保を目指しているということです。デンマークは、①に対しても総じて前向き姿勢を見せていますが、これもそうした姿勢に基づく政策選択の一つと考えることもできるかもしれません。

このようにして時事的な問題にのみ目を向けていけばいくほど、デンマークとの主従の関係を前提に、グリーンランドが認識の外側に置かれてきたとMarcussenが言う「過去」は、霞んでいくような気がします。しかし、それが消えてなくなるなどという楽観的な見立ては到底成り立たないでしょう。もちろん、ある特定の歴史の局面だけを取り出して、支配や被支配を問題視することにも注意しなければなりません。その意味で、神谷さんにご指摘頂いた、北海道や沖縄の文脈を対比させていくことは、特定の歴史的な拘束から距離をとりながら、その歴史に立ち返り、「わたし」たち一人一人の自己認識をアップデートさせていく絶好の機会になるのだらうと思っています。



ヌークの小学校



ヌークの小学校で日本紹介イベント

高橋美野梨 プロフィール

1982年生まれ。博士(国際政治経済学/筑波大学)。日本学術振興会特別研究員(DC2, PD)、オルボー大学北極研究プラットフォーム客員研究員、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教などを経て、2021年より北海学園大学法学部政治学科准教授。主著にShinji Kawana and Minori Takahashi (eds.). Exploring Base Politics: How Host Countries Shape the Network of U.S. Overseas Bases. Routledge, 2021やMinori Takahashi (ed.). The Influence of Sub-state Actors on National Security: Using Military Bases to Forge Autonomy. Springer, 2019など。